

斯界に鳴るものである。然るに其支配人が斯様な蕭散なる書畫に心酔すると云ふ事は甚だ奇妙である。然し其後金子様、柳田様との好對照を知るに及びて、是れ有る哉。鈴木王國の昌んなることやこの感を深からしめたのである。蕭灑たる風容、理智の光を含む其眼、人言に耳を傾けられたる悠揚寛宏の態度、而も斯人既逝矣噫。

(四) 逸 事 三 片 大 松 幸 吉

其 一

故人曾て曰へり、「僕は業務以外の社交は出來得る限り避けたいと思つて居る、凡そ人と人と相識る以上は、終に敵となるか味方となるか、何れか一方免れざる所である。中立などと云ふ如き曖昧なる態度を持つことは、優勝劣敗、即ち自然淘汰の激甚なる現世に於て、斷じて容れざる所である。自己が確乎たる信念を抱き、所謂踏正勿懼の方針を以て活動せば、味方などは必要とするに足らない。況や好んで敵を求むるが如きは、拙策の甚しきものである」と、宜なる哉。わが鈴木商店經營の會社は

其數少からざるも、故人が其何れにも重役として名を列せられざりしことや、是れ即ち無用の敵味方を作らざるを根本的信條として、一意専心主家の爲に奉仕せらるゝの趣旨に出でたるものと信ずる、之を賣名の徒が肩書欲しさに、暮夜竊に上役の門を叩くに對照すれば、其雅懷や欽慕すべく、實に泥中君子を見るの感がある。

其 二

故人が先見の明に富んで居られたことは、不肖其後進として造次にも忘れ難く敬服措く能はざる所である。

歐洲の大戦は、其結果として形而上形而下共に一大改革を招致した、社會問題殊に階級鬭争の思想は、凄じき勢を以て全世界を風靡せむとするの概がある、現代は正に思想界混亂の巷と化しつつある、諺に「禍は下から」と曰ふが、物質的分配に不平を鳴す者は主として筋肉労働者である以上、其矢面に立つ者は無論貴族富豪である然れども物質的分配の公正が肝要でありとすれば、精神的分配を均一ならしむるのは一層の喫緊事である、隨て社會問題解決の要諦は、實に教育の民衆化に在る故に其解決者として責任の最も重きは即ち智識階級である、然るに吾邦の智識階

級は、由來勞働問題に對して超然的態度を持し、殆ど之に没交渉であつた。智識階級の猛省を促すべきは實に此點である。故人夙に此に留意して、大に力を店員の智識的教化に致され、之を指導するに温情を以てし、之を撫育するに懇切を極め、孜孜として店員諸氏殊に少年諸君の爲め智識の分配に努められたので、果然其效果は顯著であつた。

現に某々大商店の如きは、戰後思想界の惡化と共に其餘殃を受け、思想上風雲の急を告ぐるに屢々であつたが、獨り我鈴木商店は、其間超然として深く社會的デモクラシーの眞髓を理解し、之を體得して更に附和雷同の譏を受けず、上は重役各位より下は少年諸君に至る迄、整然有機的秩序を保持して一絲紊るる所なく、全店一致擧つて確く精神的に融和結合し、今日の隆運を見るに至つたのは、其由つて來る所何れに在るか、是れ故人が生前先見の明を以て毎に智識の分配を怠らず、殊に少年教育に細心の注意を致された賜と謂つても溢美ではあるまい。

其 三

不肖曾て信ずべき人より吉田松陰先生の眞筆と稱するものを得、携へ往きて、故

人と鑑定を請ひたるに、一見して其石版摺なるを看破せられ、愕然自己の不明に汗顔すると共に、故人の多藝多能智識の該博深遠なるに推服するの外無かつた。

(兎) 故人の經綸 金子曜高

抑々我鈴木商店の興るや、今を距る實に二十有餘年前の事に屬す、故西川支配人は、當時高等の學舎を出て、紅顔の青年初めて鈴木商店に入り、意氣の旺なる、熱血は滾々として脈管の中に浪打てり、偶々金子總支配人の活眼達識は、新領土臺灣に着眼し、縱横劃策せられたりしが、故人等の熱心周匝なる補佐に依り、熟慮斷行、幾多の波瀾を経て事業緒に就き、名聲大に揚る、逐次内地北海道滿洲及支那に於ける樞要の商地に支店又は出張所を創設し、更に各所に各種製造工業を經營し、孜々として努めて懈らず、店運年と共に隆昌發展を來せり、蓋し故人が至誠克く鈴木商店の重力を支へ、金子、柳田両重役を助けて盡瘁せられたるの功與つて其多きに居らずんばあらず。

最近極東の天地風雲頻りに動くや、爾來吉林省事業に従事せる我等は、愈々其根底を北鮮の一角清津港に築かんと欲し、故人の未だ病まれざるの時、議を提げて故人に謀るに、此方面開拓の事を以てし、幸に其贊同を得たり、不肖の任地清津に向はんとするや、發程の前數日故人特に教を垂れて曰へらく

日本も既に國內企業より一轉して、向後國外企業の經營を要する時なれば、君等の抱負を實行すべき好機眼前に在り、何事を爲すにも、誠は天の道にして、誠を努むるは人の道なれば、凡て細心堅實に拮据努力するを忘れずして、最善を盡さんことを切望す

と、回顧すれば、神港を辭して此に半歳、よしや西に入る月を惜みて袂を湖北の天に隔つるも、常に絶えせぬ一脈の温意嬉しくもかたじけなく、百歳迄もと祈りしことも仇なれや、嗚呼紀淡の海三津の浦、首を回して遙に故人の面影を偲へば、半宵夢圓かならずして情緒綿々、呼べども今は答なく、温容復た接するの期なし、一片耿々の志、今將た誰にか告げん、眞に痛悼に堪へざるなり。

我等至誠を捧げて奮勵躍進、益々商路の開拓に努めて清津出張所の基礎を確立

し、北朝鮮及間島一帯に於ける經濟及文明の誘導者と爲り、延いて極東の開發に貢獻し、以て吾人の使命を完うすると共に、故人の熱切なる囑望と期待とに副ふあらんことを期す、冀はくは英靈照鑑を垂れ、常に我等を護り我等の事業を導き給はんことを、謹んで故人の冥福を禱る。

(吾) 遠くから見たる西川支配人 上村政吉

私は鈴木商店に御厄介になつて以來、常に遠くからのみ西川支配人を眺めて居ました、若し朝夕與に仕事して居ましたら、近く見たる西川支配人を追想も出來ませうが、其れが出來ないのは實に残念であります。

遠くから見ました西川支配人は、誠に人格の崇高な人でありました、即ち正義と眞理と莊嚴とに赫いた人であつて、そして大なる努力の人でありました。

一體世の大會社の支配人幹部と稱する人達は、多く黄金や夢我夢中の歡樂やを擅にするものゝ様に解せられて居ます、然るに我商店の重役は措いて言はず、西川

支配人の如き全く正義に終始せられたのであります。

正義に生きる人は自我がない、西川支配人の總ての努力は自己の爲めて無く、全く鈴木の上に存在し、常に國家の上に立脚して居りましたことを信じます。

總ての言動は儼として冒すことの出来ぬものがあつた、そして吾等に對せられる其態度は慈愛に満ちて居た、三千の店員は西川支配人を渴仰した、水火をも辭せない勢で働いた。

其處に西川支配人と店員との眞の心と心との交通が完全に行はれて居たから支配人と店員と何等の區別無く、互に照應し感應して一體と成つて居たのである。斯の如く眞理に生きられた西川支配人の如き人格者が、重役を助けられて始めて、今日鈴木をして世界的に濶歩せしめ得るに至つたのであると信じて疑はないのであります。

私は今黙する、そして西川支配人が其臨終の床に安らかに横はつて現在の大本を思はれた時、過ぎし二十六年間の惡戰苦闘に得も言はれぬ満足を感じつゝ、永劫の冥府に向はれたことであらうと信ずる。

(三) 故人より受けたる教訓

高畑誠一

自分は一九〇九年店に入つたが、入店以來西川さんには終始非常な御世話になつて居る、永らく海外生活を送つて居るので、晩年の西川さんの聲咳に接する機會を逸したのは、返す返すも遺憾に思つて居る。

故人の逸事としては色々な事が思ひ浮んで來るが、就中どうしても忘れ得ぬ事が一つある、入店後間も無い頃の事で、自分は外國部の電信コードの仕事をして居つた、西川さんは輸出部長で、樟腦の商賣などは皆御自分でやられて居つた頃のことである、漢堡の取引先との間に使用して居つた電信コードを改正した事があつて、其うち樟腦引合の數量表中の數量を従前の五倍に改正した、出來上つた處で早速漢堡の取引先に送つて、此改正コードは明年の一月一日から使用することにして呉れと申送つて置いた、其れから其取引先と樟腦の商賣も可なり出來、相當の時目が經つてからの事であつたが、エービーシーコードの電信で其店から、お前の處か

らの買約は合計二千五百函になるが其れて宜しいかと問合して來た、處が店では其の取引先には五百函だけ賣約をしたことになつて居るので、そんな筈が無いと能く調べて見たら、例の改正コードを先方は此方の要求通り一月一日から使用して居るが、此方ではすつかり忘れて古いコードを其儘使つて居つた爲だと云ふことが判明した、當時は樟腦などは五十函百函といふ今から見れば小口の商賣をして居つたので、二千五百函と云ふ商賣は當時の鈴木商店に取つて非常な大商賣であつたが、自分のコードの間違で賣約をしたものだから致方なく、先方には賣約を確認し、樟腦工場を晝夜兼行に動し、原料の數量を無理を言うて次年度迄も先取して拂下げ、多大の損失と犠牲とを拂つて、契約通りの積出をして貰つた事がある、コードの係は自分で、自分の間違からさういふ事になつたのだから、非常に心配し恐縮して、故西川支配人にお詫に行つた處が、叱りもせず、諄々として、「人間と云ふものは何か間違を仕出かして始めて物事に慎重の注意を拂ふ様になるものだ、今度の間違も是れだけの損で濟んだが、此事が無かつたら、もつと大きな損をして居つたかも知れぬ、兎に角今度は君も良い經驗をしたから、今後は萬事に充分氣を付け

てやつて貰ひたい」といふ意味の、寛容にして温情の籠つた御訓戒だつたので、却つて大に恐縮すると同時に、故人の徳に敬服し、今後は再び斯かる間違を繰返すまいと心竊かに期する所があつた、爾來幾星霜を経て戦争中の商賣にも携はつたが、今日迄幸にも大過なきを得たのは、偏に故人のお蔭だと思つて、常に感謝して居る次第である。

鈴木商店が五十萬圓の資本を一躍五千萬圓に増資し、内容外觀共に世界的大商店として更に世界的商賣に活躍せんとする今日、西川さんが其増資の発表をも見ずに長逝せられたのは、故人は言はずもがな店としても洵に遺憾に堪へない次第である、併しながら西川さんの丹精して培はれた鈴木商店は、世界的大商店として世界の信用を博し、店運隆々たるものあるに至つた、其れにつけても、吾々は故人の功績を忘れてはならぬと共に、故人も亦以て瞑すべきであると思ふ。

(三) 故人の性格 永井幸太郎

一 稜々たる一角 「まろくとも一角あれや人心あまりまろきは轉びやすきぞ」
 と云ふ古歌を思出す、故西川氏は玲瓏玉の如く、此人に接するや春風駘蕩醇々乎と
 して長者の風があつた、けれども確に稜々たる一角があつて、誠に冒し難い所があ
 つた、其の一角と云ふのは、謹嚴にして曖昧な事が大嫌ひ、一々右か左かを判別せざ
 れば已まず、曖昧模糊の中に葬り去る如きは嘗て見受けたること無し、日頃温情溢
 る、許りなるが、苟も道ならぬ事があれば容赦せずと云ふ様な凜乎とした點であ
 る。

二 光風霽月 故西川氏が何かの誤解で「是れは君何うしたのかね」と詰らるゝ
 ことがある、其事は斯く斯くでと説明すると「あゝさうか」後には胸中一物もなし、此
 時の同氏の態度が實に氣持がよい、光風霽月と云ふのは斯かる事かと思ふ。

三 布袋の石像と棕櫚と梧桐と竹と八ッ手 故西川氏邸に入つて行くと、玄關
 の前に布袋の石像がある、奥の間(臨終迄寢て居られた)へ通ると、庭には棕櫚と梧桐
 と竹と八ッ手とのみが植ゑてある、此の五つが故西川氏の性格を遺憾なく表現し
 て居ると思ふ、私は梧桐か棕櫚か竹か八ッ手かを見る毎に、故西川氏の面影が髣髴

とする。

四 故人の富士登山と瘠我慢　　故西川氏を先導に、今は同じく故人となつた佐山君、目下倫敦に在る高畑君、楠瀬正一君、山口君及小生の六人連で富士登山に出掛けたことがある。八合目位から血氣に逸る若者ども、我一番鎗の功名をと駈け登らん許りに上る、一同中の比較的老齡者たる故西川氏は、玉なす汗を絞りつゝ、喘ぎ喘ぎ後からついて來られた。平素の温乎たる故人には、其君子の如き温厚味の爲に、「敗けじ魂」や「瘠我慢」と云ふ氣魄は隠れて居るけれども、一朝事ある際は此氣魄が片鱗を雲間より示すことがあつた。

五 故人のパンクチュアリチーと鈴木商店の對外貿易　　嘗て金子氏より、一言にして之を蓋へば故人は几帳面にして、如何なる手紙に對しても些末なる問合に對しても、必ず極めて迅速に丁寧に一々返事を出す。約束したら決して期日を間違へないこと云ふ氣質のため、對外信用を得るに與つて力あることを認めると言はれたことがあつた。右の様な故人の高風や美德が、故人の死後も尙ほ我鈴木商店の商内振を指導して行くことと思ふ。

(三) 西瓜のやうな 澤村亮一

或る句集の中に

雪折れの竹を悼むに似たるかな

と云ふ句を見たが、此れ位脩竹故人の全生涯を追慕するにふさはしい句は無いと
思ふ。

今から故人の人格を聯想して見ると、恰も黎明に障子を開きて白皚々たる銀世界を見た時のやうで、其際に感ずる晴やかな気分は、地上の凸凹なんか殆ど目に觸れない。

今故人の逸事を記さうとするのは、丁度この雰圍氣から強ひて地上の凸凹を判じ見るやうな感がする、とは云へ雪解の午後に路上を辿る積りになつて、見聞の儘を記して見やう。

故人に相談に行くとき、大抵便箋の上を走らしてゐるあの尖端のブツキラ棒なJ

ペンを置いて、温顔にてこちらの意見を充分聴取せられた後、よく「よかる、やつて御覽」と言はれた、簡潔な言葉であつたが、其前句後句を味ふと、抑揚の中に云ひ知れぬ温みと鞭撻とが始終含まれてあつた。

文字の修辭には中々嚴格な方であつた。

アテ字は非常に嫌ひて悉く修正せられた、或時「頻に虎視眈々」と書いたら、頻りの字は蛇足だとして削られた、然し一方むつかしい文字に屈托しないやうに、漢字の代りにチヨイチヨイ片假名を混せて使用せられて居つた、紙片は公私共に能く利用せられたやうだ。

毎夕宅に歸られた時、翌朝出勤の際に持參すべきものをチヤンと書きつけた紙切を、必ず家人に渡して取揃へ置かしめられたさうで、従つて門前から踵を回したりするやうな事は決してなかつたと云ふ、好きな煙草なんかも幾種かを、其日に喫むだ不足の分だけ、宵の中に必ず補はしめてあつたさうだ、新規入店の店員や見習員の姓名は、幾人あらうが一度聞いたら屹度名指をして居られた。

讀書には餘程趣味をもつて居られたやうで、子供が邪魔になること、あの青桐と

棕栢の葉陰になつて居る座敷故人は此室を棕栢書樓と稱へて居たに獨り立籠つて夜更くるまで讀書に耽つて居られたさうだ。

故人が病中の手簡にも

追々快方に向ひつゝあるも、何分獨乙の如く食糧封鎖を受け居候爲め、十分の氣力快復不致、春の日に背をあぶりつゝ讀書三昧に耽り居候、日本人は矢張り香の物に茶漬か腹一杯遣れねば駄目に御座候

の一節がある程で、病褥の枕頭には、想痕其他數帙の書籍と外國電報のコツビーが重ねてあつた、他界されて後も、生前に注文せられた書籍が續いて到着するので、靈前には銀紙で卷いた葉卷煙草の一重と共に新刊の書籍が供へてあつた。

嘗て故人は別懇の間柄であつた某氏から、其臨終に際し遺子の將來を託せられたことがあつた、然るに遺子は、亡父の昔氣質と正反對に至つて現代的な質で、故人の不斷の勸言にも更に耳を傾けず、到頭財産を蕩盡してしまつた。

其前親戚の者の乞を入れ、餘財の一部を處分して母や妹の萬一の場合に備へ、種々の面倒を見てやつたけれども、放縱な彼れは、病褥にさへ故人を訪ねて、かなり勝

手な事を訴へて居た

流石の故人も、此時は餘程機嫌を損ねられたやうだけれども、尙ほ家族の行末を心配して

小生も病中如斯事にアクセキする必用は無之も、亡友に對する最後の務め故、出來る限り入念に處理仕度云々

と書中に記された如く、自身の重患にも拘らず、飽く迄他人の將來を心配して厄介を辭せられなかつた。

故人が竹を愛せられたことは、雅號にも脩竹とある程で、書齋の前栽には竹林を一廓にさへしてある、そして其隙目から小さな祠がチラチラ覗かれ得る、故人は毎朝露を踏んで此祠に詣で、燈明を上げて瞑目禮拜之を久しくして居られたことであつた、春風の如き温情、秋霜の如き嚴肅は、或は此祠の中に養はれたのかも知れぬ。

團々の西瓜のやうな圓滿と、そして眞紅に充實した赤誠が、故人の特有物であつた。

(五) 家庭に於ける故人 後藤半七郎

逝く時の流に棹さす笹小舟は、白駒の隙を過ぎ行くが如し、顧れば故西川支配人
 逝いて此に半歳、吾人の胸底深く印せられたる、故人の謹嚴なる風貌と、溢るゝが如
 き温情とは、月日と共に彌々強きものあるを覺ゆ。

惟ふに、鈴木商店の發展史に燦として光輝ある、二十餘年間終始一貫、堅忍不拔、私
 利に奔らず、聞達を求めず、店の爲に孜々として奮闘せられたる、故人の公生涯は、店
 員既知の事なれば多く語らず、余は故人が一私人又は家庭の人として、欽慕措く能
 はざる二三の事柄を追想し、其徳を讃せんとするものなり。

故人は子女數人の父たり、邸内に子女の健康を培ふべき餘地なきを憂ひ、其所有す
 る借家數棟を取崩して、好個の廣場を得、配するに小高き丘、金魚の池、四阿家等を以
 てせり、蒼天の下、青芝を踏占めながら、欣喜雀躍無邪氣に戯るゝ、子女の笑聲に、慈父
 の歡びを湛へつゝ、庭内の一隅に佇む、故人の倂今猶ほ見るが如し、繁忙なる公務の

傍ら英雄閑日月てふ餘裕と私慾に恬澹なる美質なくしては、能くする所に非ざるなり、日朗かにして碧天雲なき日曜の午後など、再度山常盤木の色濃き樹蔭に、或は錨山の邊り清澄なる自然の靈氣に、心身の俗臭を洗ひつゝ、夫人と子女を引連れ、嬉々談笑せる故人の容姿を見ること屢々なりき、實に故人は山の憧憬者なり、其邸宅を宇治野山に構へたる亦故ある哉。

鈴木商店支配人としての故人の邸宅は、決して毫壯と云ふべきにあらず、されど清楚整然、訪ふ者をして自ら肅然たらしむるものあり、余往年初めて其宅を訪れたる日、偶然子女の居室に歩を運び、特に注ぐともなく視線を壁間に懸れる一面の額に注ぐ、掲ぐるもの畫にあらず、又所謂書にもあらず、只一葉の白紙に數行の細字を記されたるのみ、二三歩近づきて視るに、其は即ち西川一家各自の氏名、生年月日を連記せるものなりき、子女は此室にて遊びの間、相寄り相教へ自然に之を知得し一家に於ける自らの立場を知ること共に、常に父母の偉大なる慈愛を聯想し得るなど、故人の子女に對する深き心遣の程窺はれて床し。

事務家として特に卓拔の技能を有せし故人は、家庭に於て亦其非凡なりしを窺

知するを得べし。去る五月十五日、故人の病歿は誠に突然の事にして、吾人の共に意外とせし所、殊に夫人に至りては、連夜の看護に引續き、此厄に會し、其靈を守り、傍ら來訪客の應接に忙しく、他事を顧るの寸暇だになし、されば臨時外來の數多き手傳人は、彼此物品の在所を求むるに、尠からず混雜を來せし筈なれども、事實は之に反し、何れの品を求むるも、殆ど掌を指すが如かりしと云ふ、即ち故人は貴重の品は言はずも、がな、些細の布片に至る迄之を藏するに種別を以て分類し、抽出しと云はず、紙包と云はず、一々之に附するに見出し札を以てして、其内容を明かにせり、嘗て夫人は曰く、「佛は只一句の遺言だにせざりしも、生前不斷の訓誡は總て是れ一條の遺言と謂ふべし」と、宜なる哉。

故人の性格に和するに、夫人の從順なる徳を以てす、故人の大は是れに依りて倍々擧れるを覺ゆ。

憶ふに四十有七年の故人の生涯には、奇行逸話の特筆すべきもの無かるべきも、日常の言行皆此れ逸話の連續にして、其何れの斷片を取るも、吾人後輩の規範たるざるものなし、實に故人の如きは、謹愨身を持して公私共に幾多の教訓を垂れたる

者、隠れたる偉人とや謂はん、恩人とや謂はん。

⑤ 手 向 草 大 野 義 男

西川氏の逝去は意外千萬の出来事にて、店の損失絶大、到底かけがへを求め得べからず、實に何とも申しやうのなき事なり、殊に吾人事係は支配人室の延長にて、其事務は一に同氏の指揮の下に行はれ居たる點に於て、哀悼の念一層切ならざるを得ず、此は西村正雄氏が、過ぎし五月十八日、京城より特に寄せられたる書信の一節なり、噫西川支配人の易簧は、故人を識る者の、齊しく意外の出来事として深く悲しむところ、西村氏は正に我等の言はんとする所を言はれたるものにて、苧環の絲線返し歎けども、今は詮なき痛恨事にこそ。

故人の人と爲り行狀など、世にすぐれ人の鑑と爲すべきもの多し、されば我等は更に、既往二十七年間故人と共に鈴木商店の經營に従はれたる金子大人の申されし如く、故人の偉大なる感化と功績とが、鈴木商店三千人の精神に宿りていよいよ

其光を輝かし、故人の英魂が永く我等の間に生きて働くべきを思ひ、感奮興起して
 まます其業を勵み其事にいそしみ、店運の隆昌を圖りて故人の志を成すに力む
 る所なからでやは。

不才義男、從來西村氏等の驥尾に附して員に人事係に列り、日夕故人に親炙して
 恩眷を辱うせる者、今や其喪に値ひて哀傷に禁へず、景仰の情いごとく切なり、乃ち感
 懷を述べて國風十數首を作る。(店葬の翌夜さびしき雨の
 音を聞きつゝ謹みて識す)

思ひきやたゞ假初のいたつきに

ごはの別れごなり果てんごは

夢ならば醒めよ現ごおもほえす

うつゝを夢になすよしもかな

いたつきははやも癒ゆへしいでゆにも

行かましごさへ語りませしに

假初のいたつきごのみ思しけん

遺言ゆいしよ何もあらなく

宇治の山やま松風はきこゆれと

きみかみ聲をきくよしもなく

よしやその水はかれても西川の

いさぎよき名は世に流れつゝ

勵精恪勤身を以て衆を率ゐたまへりければ

おのかしゝその務めをは盡せよと

身をもて人にをしへたるきみ

病中なほ何くれとなく店務を見たまへりしほどに

いたつきの身をしも忘れ終りまで

おのかつとめを盡しましけん

人を知りて善く任じ各其處を得しめたまへりければ

人おほき人の中より人を得て

人となしけん人ぞこの人

日ごろ書畫の類を愛玩せられ鑑識にも長じ給ひしと
承りけるほどに

樂みの一つなりけんとりとりの

書畫のてふりをあけつらふこと

自ら雅號を脩竹と曰ひたまへる程にいみじう竹の畫
を好みたまへりければ

ほどほどに節はありても吳竹の

すくなるころもたまほしとて

五月十三日水壺の跡うるはしう横濱なる北村和三郎
の君に寄せたまへる玉章は故人の絶筆と承りければ

絶筆とさくたにもものゝかなしきを

その日の二日まへと知りては

みまかりたまひし後初めて支配人室に入りける時

心あらはぬしなき身をや怨むらん

わひしくのこる椅子もつくゑも

御机の邊に灰皿の残れるを見て故人の愛煙家なりし
を思ひ出てければ

はかなしや残るたはこの灰皿の

灰のかたちもくつれはてぬに

店葬の日會葬者約三千名頗る盛儀なりし程に

行く春や君をかなしむ人の群

君逝いて春も名残や風くろし

(庚) 故人の眞情 宇野一夫

故西川支配人の部下に對する温情の厚かりし事は、今更言を俟たざるも、眞實敬服に値する一例を記述して、故人を偲ぶ因縁とす。

江州人某、豫て在學中より鈴木商店に入らんことを望みたりしも、不幸其選に漏れぬ、されど宿志止み難く、如何にもして入店せんと焦慮中、幸ひ某の父は西川氏と舊知(西川氏幼少時代の小學教師)の間柄なりしかば、父より氏に依頼する所ありたり、同郷且は舊師のことゝて、氏は特に引受けて採用せられ、小生の部に配し小生に旨を含めらる、爾來某の勤務振につき聞糺されしことも屢々なりき、其都度某に對

し西川氏の意の在る所を傳へ、恪勤酬いる所あらんことを勸告激勵せり、然るに性來修らざりし操行は容易に修るべくも見えず、表面頗る謹直を装ひ居るも、内面生活に於て依然淪らざりし結果は、遂に金策に窮し高利を借るに至れり、期日到來の際、父は勿論友人其他に就き出來得る限り奔走せし様子なるも、一再のみならずしことゝて何れにても目的を達する能はず、一方貸主は晝夜の別なく身邊に附纏ひ返却方を迫れり、窮餘の策として遂に西川氏の私宅を訪問し、之が救濟方を懇請せるも、謹嚴なる氏は即坐に峻拒し、且其不都合を叱責して退出せしめ、翌朝小生に前記事實の眞偽を問はる、小生は其間の事情を承知せることゝて、相違なき旨を述べしに、一考後某の父に出狀し其意向を徴しては如何との御話に付、早速其由を認め乃父に出狀せり、折返し返書到着、其要旨は、西川支配人の御厚意は眞實感謝する所なるも、既に今日迄彼れが爲に支出せし失費は相當多額に上り、今又更に出金することは到底堪へ難き所なるのみならず、御店に對し左様なる不都合を敢て申出でたる段洵に恐縮に堪へず、宜しく即時解放されんことを望むとの意なりき、西川氏に其旨を通じて之が措置を謀りたるに、普通ならば解職すべきが至當なるも、温

情玉の如き氏は、父はさることを申出づるも、眞に親として忍ぶべからざる所を忍びて申越せしに相違なし、今斯の言に隨はんか、某をして自暴自棄に陥らしめ、遂に前途を過らしむるに至らん、よし余に於て之を引受けんと、直様財囊より金券を取出し言はるゝ様、余の金とせず君の私金なりとして貸與し、出來得る範圍内に於て返金方法を嚴重に申聞けられたし、實行を見るに至らば眞面目に立歸りたる證據と見るを得んも、履行出來ざる場合は所詮將來を望む價值なからん、宜しく本人に懇説して蒙を啓けとて、所要の金員を小生に與へらる。

斯の如き言行は、宏量無邊なる氏にして始めて能くし得るもの、言外に含める幾多の真情に至りては、人をして徐ろに感泣せしむるものあり、録して懷舊の辭とす。

○五月十五日西川氏の長逝を憶みて

笠山

おもひきや烏雲に入る日なりけり

若竹に見るよしもなき別れかな

○五月十九日密葬の當夜

同

煙と化す今宵を啼けよほとゝぎす

○五月二十三日店葬に列して

同

たてまつる夏花につどふ人数かな

つどふ人きみをかたりて汗一日

(五) 故人の言行 土居英成

噫西川支配人は再び歸らぬ旅に立たれ給ひぬ、賤の苧環繰返しくり返しても悲しきは五月十五日の朝なり、豫ての御病やうやく緩うなりて、全癒の日も近からんご、祝ひの物まで整へ置かれしご聞きしに、其甲斐もなう、遂に悲しごも痛ましき御有様を見んごは、誰か夢にだも思ひ設くべき、實にや追慕の涙乾くひまなきにつけて、寢食をも忘れて御看護に御心を盡されし御夫人を始め、取残されし御子達の御悲歎の程推測るに餘りあり、あゝまゝならぬ浮世ごは云へ、御年僅かに四十七、花ならば今を盛りなるに、如何なれば心短き山風は、かくもつれなく吹き散らしけん、茲に亡き人の言行の一端を書綴りて、在りし昔を偲ぶよすがとしぬ。

日曜もなしに働かれしこと

朝早く夜遅くまで、日曜も祭日もなく、一意専心身をも家をも忘れて、只店のため終始一貫奮闘努力せられたるは、寔に店の柱ぞと景仰措かざる所なり。

書畫の鑑定は堂に入りしこと

金や名譽を超越して、只是れ人格の修養に志され、寸暇を得ては東西古今の書を繙き、或は書畫の鑑賞に其蘊蓄せる眼を曝され、世の憂さをも忘れたるが如かりき。

靴音の高かりしこと

電話に、商談に、タイプライターに、雜然たる本店五百人の人々が活動の音響裡にかの勇しき純白のワイシャツ姿、エヘンエヘンの咳拂ひと共に、靴音高く踏み締め踏みしめ濶歩さるゝ様は、今尙ほ目のあたり見るやうにて、恰も勇將の采配とつて三軍を叱咤するが如くにて、士氣爲に振ふこと幾層倍なるを知らず。

春風の如き温味ありしこと

よく人の長を取り短を捨て、光明面を見て暗黒面を見ず、凡てを善意に解し、人を信じ、最も同情に厚く、恰も春風の如き温味あり、麾下三千の店員をして各其處を得

せしめ、笑つて其馬前に死せんことを誓はしむ。

半焦げのメモのこご

一片の紙一筋の紐だに粗かにせず、その平生用ひられしメモは、大抵反故の裏などにて、かの大正八年の火災の際、便箋其他の帳簿類の半焦となりて山積せしを見られ、之は勿體なし、メモにでもなりぬべしと、當意即妙、火災後使用のメモは斯くして作られしなり。

西川氏の御子達の身の上を想ひて

英 成

竹に來て忠と鳴くなる群雀

孝おもふ身の聞くぞ悲しき

(六) 人を見るに細心 土橋英太郎

故西川支配人が、如何に質素を貴び、如何に人を採用することに注意せられしかは、誠に感服せざるを得ず。

約三年以前、店に多くの人の入用ありし際、種々の經歷の人が入店する折柄、偶々小生の知人で、元相當の資産家の息で、五年間も酒屋に奉公し、商賣の方には多少の經驗ある二十五歳の男子、別に深い學問はなきも、身體強健、實直らしく見受けられ、人事係に於ても、ほゞ採用の心組なりしが、愈々支配人の引見となり、例の如く本人に質問等ありて引見済みたる後、西川氏より、只今の人物は別に惡質を帶ぶる點は見出さざるも、左手の指に金の指環を嵌め居るを見たり、青年にして斯の如き裝身具を嵌め居るは、虚榮心に囚はれ居るものと認む、斯の如き人物は、我店風に副はざるを如何せん、氣の毒ながら採用見合せたし、このことなり、乃ち特に同人の指を見れば、果して燦たる金指輪を嵌め居たり、小生等は、随分細密に注意を爲し居たるも、指頭に迄氣附かざりしは、汗顔の外なきことなるが、又以て故西川氏の人を採用するに如何に細心の注意を拂はれたりしかを窺知すべし。

(兎) 追慕の念止み難くして 高橋 行次

一 會見と印象

大正六年九月二日、宇治川の店お家様の部屋でお目にかゝつたのが、西川様に接した最初であつた、森支配人も御列席の上、鈴木商店にかくかくの仕事がある、君は一つやつて見るか」と問はれ、「あなた方の御援助と御指導があれば、自分の僅ばかりの経験を土臺として微力を盡させて戴きます、然し今後の施設其他には多少金も人も入りませう」と云ふと、「其れは宜しい、現在の職務の方を始末して成るだけ早く來るがよい」と言はれた、其凜としたお言葉、温厚の中に威嚴を備へられた其御風采、紳士の典型とは斯くの如き方を云ふのであらうと思つたが、其後見習員の引見其他にて、親しく接し親しく語る機會多く、益々其感を深くした、實を言へば、聲咳に接する迄は、大商店の樞要の地位を占めて居る方だから、爛眼人を射ると云ふ様な風手を備へて、中々近づき難いものだらうと想像して居たのだが、事實は之に反したので、斯の如き方なればこそと思つて益々敬慕の念を深くした。

二 次 亞 燐

太陽は灼々としてバラツク建の屋根に照り付け、煽風機の風も汗を乾し兼ねた

る大正八年の夏、支配人室の側を通ると、何時も瀟洒なお姿が葦簾越に見えて、朝と云はず日中と云はず、何時も熱心に事務を處理して居らるゝのが見えるので、其度毎に少からず感激したのである。

自分が東京を出る時、心易い某醫師が、運動をせずに頭を使ふ者は之を飲用するがよいと云つて、次亞燐を勧められた、それで早速其れを二瓶買つて贈呈した處、次の様なお手紙を戴き、西川様の義理の固いのに今更驚いたのである。

拜啓今朝は御親切なる御手紙と共に次亞燐二箱御贈與被成下誠に難有拜受仕候、小生は由來頑健なりし爲か、御醫者に手を握り貰うこと頓と好み不申、又生來セツカチなる結果か、悠々醫師の玄關にて空しく待たされる事が非常に嫌なる爲か、餘り御醫者の藥なるものを口にせず、大抵の場合は賣藥にて濟ませ居り候次第、それも妙に効果ありて幸ひ鈴木に小僧として入店以來約二十五年間格別の大病もせず今日に及び候、然るに追々老境に入りたるか、昨年來胃腸の工合悪しく、取分け今夏はバラツク建の暑さに當てられたるか、食堂に入りては更に食事進まず、少々夏瘦せを覺え申候折柄に付、御好意より御贈り被下候妙藥は早速

服用可致者に御座候：(中略)：不取敢御禮まで草々頓首

三 タラコン湯

精勵な西川様のお姿が數日見えぬので怪んで居た處、胃の工合が悪くて靜養して居られるとのことであつたから、早速お見舞に參邸した。

自分の父が先年胃の工合が悪く、醫者に見て貰つたら胃癌と診斷せられ、長くはないから其積りをせよとまで言はれ、骨肉の者は非常に悲觀したのだが、タラコン湯と云ふ藥を東京から取寄せて服用した處、不思議にも日ならずして全快し、以前よりも強壯になつた、自分も大正八年の夏頃胃の工合が悪く、毎日胃腸病院に通つて居た時、出勤時間が幾らか遅くなるので、西川様迄其事をお斷りすると、僕も此頃胃の工合が悪いので賣藥を飲んで居る、もう僕等の年になると腹の機械もいたんで來るよ」と言うて笑はれたが、其後自分は父から其藥を勧められ試みた處、非常に工合がよくなつた。

其れで自分は、胃の病は治し得るものである、タラコン湯は不思議な力がある、と云ふ信仰を持つて居るものだから、西川様の胃も此力で治さねばならぬと思ひ、其

タラコン湯を二箱持參し、父の全快した事を語り、胃はきつと治りますと言ひ、自分も必ず全快せらるゝものと信じて歸つたのであるが、之が西川様にお目にかゝる最後にならうとは夢にも夢にも思はなかつたのである。

四 現 か 夢 か

大正九年五月十六日の日曜日、昨夜は遺骸のお側でお通夜を爲し、永眠せられたお顔を拜して歸つたのであるが、西川様と幽明境を隔つるに至つたことがどうしても夢としか思へぬ、然し又永別したる現實の悲みは堪へ難き迄我を苦しめ、春風温き花園に楽しく逍遙して居た身が、俄に冷たい寂しい薄暗い谷底に突落された様な感じがして、氣も亂れ心も落付かず何の目當も無くふらふらと町に出た。

何處を歩いて居たか分らぬが、過ぎし樂み今日の悲み、取止めもなき事取返しもつかぬ事など思ひ續けて居る間に、身はいつか青谷の郊外とある池の邊りに來て居た、輕き風は緑の色まだ淡き池塘の草を吹き、紺碧の空には銀白の雲帶の如く流れ水の音か鳥の聲か清き自然の音樂は何處からともなく聞えて來て、悶え惱める我心も澄み、其草の上に横はりてじつと其雲を眺めて思に沈んだ。

或雜誌で、心臓の鼓動の止つた人に生きた人血を注入して蘇生した話を讀んだことなど思出し、逝きし人の魂返す術もがなと、出來ぬことなど考へて空想に耽つて居ると、昨夜のお通夜と悲みとに疲れた我は、現か夢か西川様が蘇生されたこの靈感に打たれた、此喜びを持続さす爲めには我生血を捧ぐるにいかて躊躇すべきいざ立たんと邊りを見れば、現實の我は柔き草の上に寢て居て、空の雲は未だ消えやらず、影は池の水に在る、凡て世に在るものは消える時が來れば消果てる、影は影ある間に楽しむべしと、我の理性を我から故意に滅して再び實相を見るべくお邸に向つた。

阪神急行電車にて通る毎に、其池塘の一角は窓の外に見える、我目に其處の映る時、神よ我敬慕する人の靈に護りを加へ給へ」と默禱しながら過ぎ行くのである。

(亮) 私の見た西川さん
谷垣勝藏

御大喪の記念として、明治天皇の御聖徳を録した冊子を、私の當時勤めて居た中

宮小學校の兒童全部に寄贈して下さつたので、鈴木商店の西川さんは此時に知つたのでした。

西川ふみ子さんが學友の伊藤靜子さんと大の仲善して、何時何處でも二人の影を見るのが、私には珍しく優しいことに感じて居た、そして今一人妹のあき子さんが、よくよくお姉さんの後を追つて遊んで居るのが目に着いて、興を惹起さずには居られなかつた、聞いて見ると先生方も同様に感じて居た、何れも勝れて優しく、學藝にも秀でて、居る、小さき此秀才達に好感を持って居ない者は無かつた、此姉妹のお父さんが西川文藏さんであつた。

奥さんにも時折お目に懸り、伯母さんといふ方にも度々お目に懸つては居たが、格別お話をしかけられたこともなく、進んでお話することもなくて過して來たが、唯奥床しい方々ばかりなので、美しい御家庭を想見して居た位でした。

今年の一月半ば頃の事でしたが、山口さんが學校に來られて、西川の弟息子がこれこれだから靈子術をやつて見て呉れないかとのことでした、山口さんは永年の知己で、神戸區の教育會の事や、學校建築其他の教育事業には、骨身も時間も惜まらず

赤誠を捧げて奔走して下さる方で、「學校のおぢさん」と誰とはなしに言習はして居る方、此れが西川の奥さんの御實家であることも聞いて居ました。

早速承知して伺つたのが御主人に逢つた最初でした。底の知れない資産と事業
ことを持て居る鈴木商店の支配人ですから、軀幹長大眼光人を射容易に近付けない
方であらうと思つて居た、全く豫想は外れて、直にふみ子さん、あき子さんのお父様
であつたなと感ぜしめられた、色も悪く瘦せもして居られた、親みのある眼ざし、聲
話振、話題が全然實業家らしい所は見えない、寧ろ道學者で精神家の君子人ごより
受取れなかつた、私共は自身には其れだけ自己を信じないが、小學校の教員は尊い
人様の子寶を預つて居る關係上、どんなに社會に時めいた方でも、私生活の方面で
お話をするものだから、話が仕易いし、先方も此天職に對して相當敬意を拂つて先
生先生で話される、此れは私共の得分でせう、殊に西川さんと話して居ると、全く私
共の領域に這入つて來られるので、少しも氣が置けなかつた、そして又私には、西川
さんと鈴木商店、私の耳に入つて居る華やかな潑瀨たる進取的の)ことを結付けて考
へる様な機會も與へられなかつた。

其れ以來亡くなられた迄の交際は、ほんの四ヶ月に満たない位でしたが、私に與へられた印象は數十年の交友よりは多い様に思はれる。

私共の話は、熱鬧な地に遠ざかつた靜かな煖爐の側で、利害を離れた世間話でした。だから一倍床しいお人柄も直覺せられ、世を憂ふる赤心を吐露せられるので、十時十一時迄も夜を更かすことがありました。

其れに話をして見ると、奥さんは私が師範學校の在學時代に高等二年生として受持つたこともある、私は明治二十七年に卒業して地方に歸り、西川さんは二十七年に地方から神戸に來られたと云ふので、三人で昔噺がはづむと云ふ譯で、御一家の誰も彼も他人とは思はれない、のんびりとした氣分で、夜の更けるのも知らなかつたのでした。

初の程は、勿論令息の手當をして居たのでしたが、西川さんも太靈道には趣味を以て居られ、書物も讀んで居られた、二月に入つてからでしたが、胃擴張だと云ふのだが、どうも食後工合が良くない、食味も餘り感じないと云うので、御主人の方も序に施術することになりました、胃病には相當經驗して居るから、三四回か四五回も

やれば癒りませうと言つてやつて見たが、唯氣持が良い安眠せられたと云ふ様な挨拶で、一向もう宜しいとは言はれない、此れは不思議だ、何時も客間で施術して、施術が済むと又話をせられたり讀書せられたりする、施術後の安靜が足らないのだらうと思つて、更に寢室でやつて後は就眠せられる様に更めて見ました。

けれどもどうも捗々しくゆかない、不思議に頑強なものだ、何故こんなに験が無いのかと、相當念を入れたのであつた、少しは自分も根氣負けをして、暫く伺はないで居たこともあつた。

後に參つて見ると大變、店を休んで床に就いて居られる、非常に貧血して歩行が困難になつて來たので、診察を受け檢便をした結果、胃潰瘍であることが分つた、其れも昨年十一月頃からであつたと云ふ、此れて頑強な譯も分つたので、其れから一層精力を注いで施術することにしたのでした。

幸に段々快くなられて、床も離れて庭に下りたり客間に出たりして居られたので、最早大安心と思つて居た際、思の外の急變が來て、遂に不歸の客となられたのは眞に遺憾、私は申譯なく遺瀨ない感が今に去らないのみならず御病人としても、私

が公務の暇にやる爲に思はしく伺はれないのを待焦れて居られた事など、屢々奥さんから聞いて居たので殊に此感が深い、其れに公務の都合や支障の爲に、此偉人の密葬にも本葬にも會し得なかつたことなど思合せて、何だか佛靈の不滿が遺つてゐてそうした破目に陥つたのでは無いかと思はれてなりませぬ。

お子さん方が「お父さんは校長先生より若い癖に、餘程年寄に見える」と申してゐますと、奥さんから聞きました。が、私も私よりはお兄さんであらうと初對面の時に思つたことでした、併し實際は私よりは二つも下でした。

私は二十三歳で學校を出ましたが、同じ年に西川さんは二十一歳で、内海岸の鈴木家の店に出られた譯である、爾來二十六年間同家の柱石となつて、砂糖問屋から天下の鈴木商店にのし上げられた大元老である、私共の暢氣坊と違つて、幾多の苦楚艱難を經、日一日年一年と、大なる責任ある職務を執掌せられて居たのだもの、年の二つ三つ老けて見えるのは當然です。

斯様に西川さんは、數百匁の嬰兒が二十貫匁の大人になつても其體重の大なるを感ぜぬ様に、尨大な商店の内外の實務に當つて來られた、今度の病氣の外は非常

な頑健で、曾て店を休まれたと云ふこともなく、晝とも夜とも分ちは無かつたのである、其れに何處でどんな暇があつて、今日の新しい學術を修められたでせう、私はよく私共に縁の遠い實業界の消息や經濟界の状態を、話題に上せてお話を聴きましたが、其處が御本領であるとは言ひ條、常に内外に涉つて極めて明確なお答に首肯したことでした、少しも飾氣のない温和な態度で批判をせられたが、中には錐の尖てさす様な、切味のよい銘刀で截つ様な辛辣な識見で、諷殺された様なことも屢々ありました、私は常に「何處であんな勉強をせられたのであらう」と繰返して居ました。

私の驚いたのは是れだけではありませぬ、ビジネスマンとしての西川さんが、不撓不屈の大なる根氣と天稟の穎才とで、斯る大事業を翼賛成功せられたのは、別に異とするに足らないとするも、此多忙多端な人が一面趣味の人であつたと云ふ事です、病中の氏は日々床の軸物を懸換へて翫賞して居られました、私が伺ふと必ず其書畫の由來を聴くのでした、書畫家の經歷や逸事や風格や一々詳細なお話があつて、そして必ず其人格の推賞が結論となりました、所藏は支那日本古今に涉つて

随分廣い様でしたが、以前蒐集せられたものは一度他に譲つて仕舞はれた相で、其記念帖も一二ならず複寫してありました。

此道にかけての造詣鑑識が卓越せられて居たのは無論であるが、其れは決して時流を趁うてなさつたのでなくて、眞の趣味から出發した西川さん御自身の性格に基いたものだと思ひます、世間の多くは誇らんが爲の蒐集で、何等趣味の認むべきものゝ無いのが多い、西川さんのは樂まん爲の書畫、技工も技工であるが、餘程人格や性格に就て取調べて居らるゝ所を見ると、修養上に資せられて居たものと思はれる、ですから有餘つたお金で、道樂や氣紛れに買はれた様なものは無い様であるし、手放される時にはちやんと複寫して置いてあります。

西川さんには何等欲望は無かつた様に思はれました、六人のお子様方の生育と鈴木商店の經營と書畫とは、何れも同様な趣味に化して居た様に私には感ぜられました、西川さんは大厦高樓を造つて見たいの、豪奢な生活をして見たいの、大に遊んでやらうの、と云ふ様な人間じみた事は、話を聽くのも厭な顔をせられた、質素閑雅な居宅に、子供さん方でなければ書畫を友に、寧ろ仙人染みた生活がお好の様で

した、お酒も量はなく、食事も手料理以外未だ曾て要求せられたことは無いと聞き
ました、食事の嗜好と云へば、胃を悪くせられてからは、乾魚や柴鰯の様なものがお
氣に入つたと云ふことでした。

御性格は極めて几帳面で、何時どんな事があつても、決して他人に迷惑の懸らぬ
様に、どんな些細な事でも直に處理して、之を明日に延ばすと云ふ様なことはせら
れなかつた相で、御家庭の方でも、一々手控に記録して始末をつけねば、お寢みには
ならなかつたと奥様から聞きました、そんなに自ら持することが謹嚴であるに拘
らず、人に對しては決して難きを強ゐられない、曾て怒聲を發せられたこともなく
常に温顔で悠揚として、眞に君子の風を崩されたことはなかつた、非常な主人思ひ
の方で、楯間によね子刀自の肖像が掲げてあるが、一言其上に及ぶ時には、常に容を
改められるのが目に着きました、頑健な此方が健康を害されたのは、大正七年商店
に不祥事があつた時に、主人の一族を危害から避けしめる爲に、非常に努力をして
晝夜眠らず、極端な心痛と奔走をせられた時からだと聞いて居ます。

商店の内部の事は私共の知らない所であるが、上下誰一人西川さんの蔭口を叩

く者はなく、能く其號令に悦服して、店務に落度の無いことを期すると云ふ風である。友人から聞きました。私は斯んな事を思ふ。鈴木商店の今日の大を致したのは金子さんの嚴父と西川さんの慈母とが生んだものではなからうか、勿論多士濟々の大商店の事であるが、二十六年前適々此性格を異にした二人の偉人が、天稟を傾倒して他意なく奉仕したのが主因になつて、幾多の才子が集つて遂に茲に至らしめたのではないかと思ふのであります。

私は極めて新しいそして短い間の知己で、何等知る所も無いが、見聞した事、感じた事を有の儘に記して、此非凡な精力家、實業家、而も卓越した士君子たる西川さんを後世に傳へたい、立志傳に加へたいと希ふ心から、蕪雜な辭でも竝べて見たのであります。

(三) 哀しき 思出 中村寅次郎

突如、眞に突如、西川氏の訃音を耳にした私は、其れが決して有り得べからざる事

として否定する迄には至らなかつたが、何だか不意打を喰つたやうな感じが暫く私の頭腦から去らなかつたのでした、そして次の瞬間には、我知らず滂沱として涙脆い私の眼から溢れ落ちる涙が、ホロホロと兩方の頬を傳つて居たのを、今も明かに意識して居ます、私の無拘束な荒んだ心に、人生の死といふ問題を、西川氏の逝かれた事に依つて今更事新しく考へながら、野茨の宵闇にほの白い田舎道を、篠原村の住居にトボトボと辿つたのも、其れは誠に淋しい深刻な記憶の一つとなつたのであります。

森衆郎氏から、故西川氏の逸事を後昆に垂れる爲に何かな物せよと、手厚いお手紙に接した私は、全くの所一寸困つたのである、其れは生前の西川氏は餘りに端嚴な、そして又餘りに平調な人であつて、此れはと特に取立て、筆にすべき逸話をも奇行をも残されなかつたからであるけれども、私としては、西川氏の其平調な點に對して、口にするこゝも亦筆にするこゝも出来ない、或深味を持つた感激が存するのである、美しい幻影が現實として握み得ないと同様に、其感激も單に私のみにも有意義な、そして又最も深味あるものとして受入れられるより外に、表現の方法か無